

斎藤公子編集

あお き しゅ
青がえるの騎手

中国民話／絵・チエルシノヴァ



創風社



斎藤公子 1920年生れ、島根県隠岐出身。1939年、東京女子高等師範学校保育実習科卒業。主著『斎藤公子保育実践全集』（創風社）第1巻「哲学と保育」、第2巻「子どもがみんな笑える日まで」、第3巻「保育とはなにか」、第4巻「100人のアリサ」、第5巻「6歳児の保育と保育思想の発展」、第6巻「あすを拓く子ら」。『子育て』（労働旬報社）、『斎藤公子の保育論』（築地書館）、『住井すゑ・斎藤公子対談——女性は地球をまもる』（創風社）、『松田解子・斎藤公子対談——愛と変革の保育思想』（創風社）、『さくら・さくらんぼの障害児保育』（青木書店）、斎藤公子の保育絵本「サルタン王ものがたり」「黄金のかもしか」「錦の中の仙女」「森は生きている」（青木書店）、「金のにわとり」（創風社）、みんなの保育大学シリーズ（築地書館）などがある。

現 在 さくら・さくらんぼ保育研究所所長

現住所 深谷市大谷1780-5

T・チエルシノヴァ 1946年に生まれる。中等美術学校（レニングラード）に学び、その後ムーヒナ記念高等工業美術学校で織物を専攻する。1975年から児童図書のさし絵部門で働く。これまで約20冊の本のさし絵を描く。また、彼女はインテリア用の織物の下絵も描いている。

編集協力 小林道郎（ソビエト児童文学を読む会）

本書の文は、外文出版社（北京）発行の日本語版『中国民話集』を参考にした。絵は、日ソ著作権センターを通して、在モスクワソ連邦著作権協会との契約に基づき、この本のために新たに画かれたものである。

育がえるの騎手

1990年10月10日 第1刷印刷
1990年10月25日 第1刷発行◎

編者 斎藤公子

発行所／株式会社 創風社
発行者／千田顕史

〒113 東京都文京区本郷4-17-9
電話03 818-4161 振替東京2-129648

印刷・製本／KYS

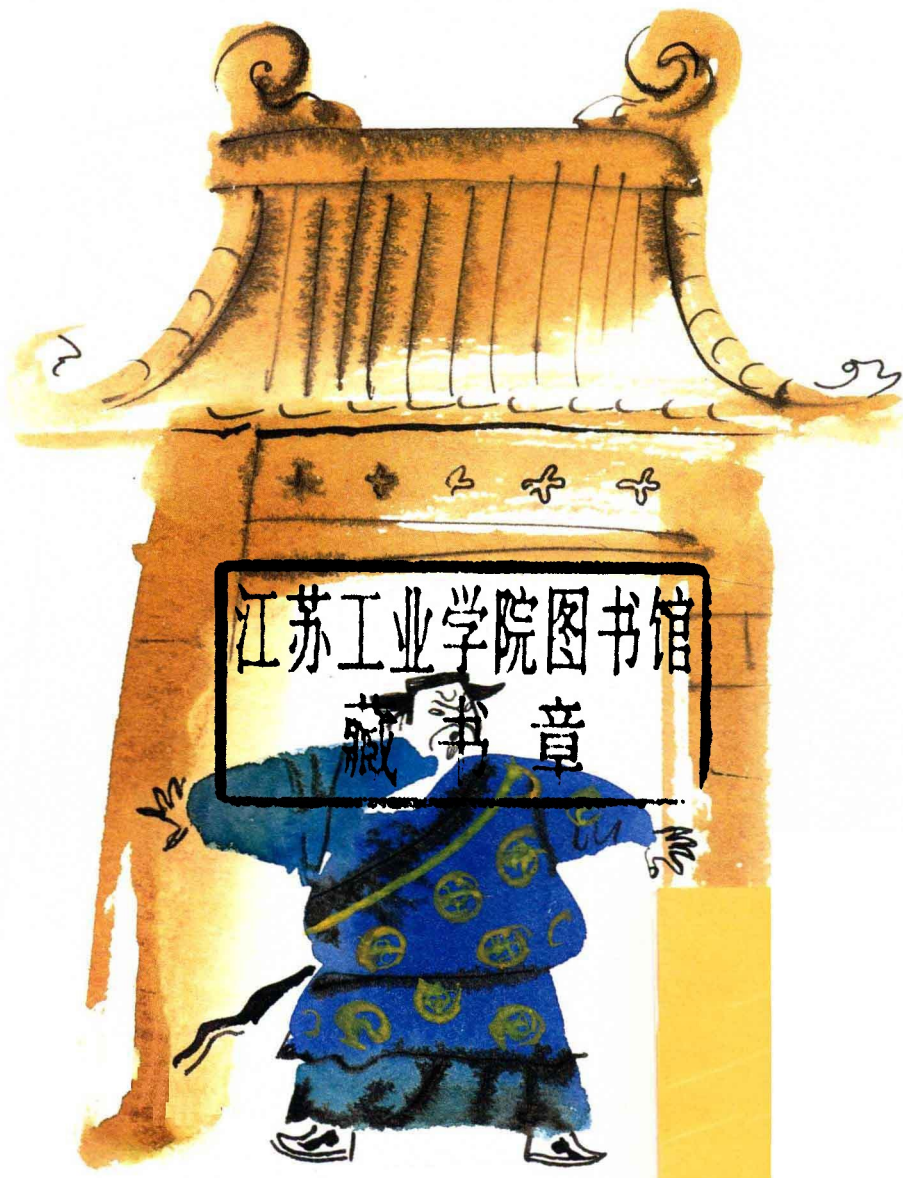
落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN4-915659-39-9 C8771 P1854E

斎藤公子編集

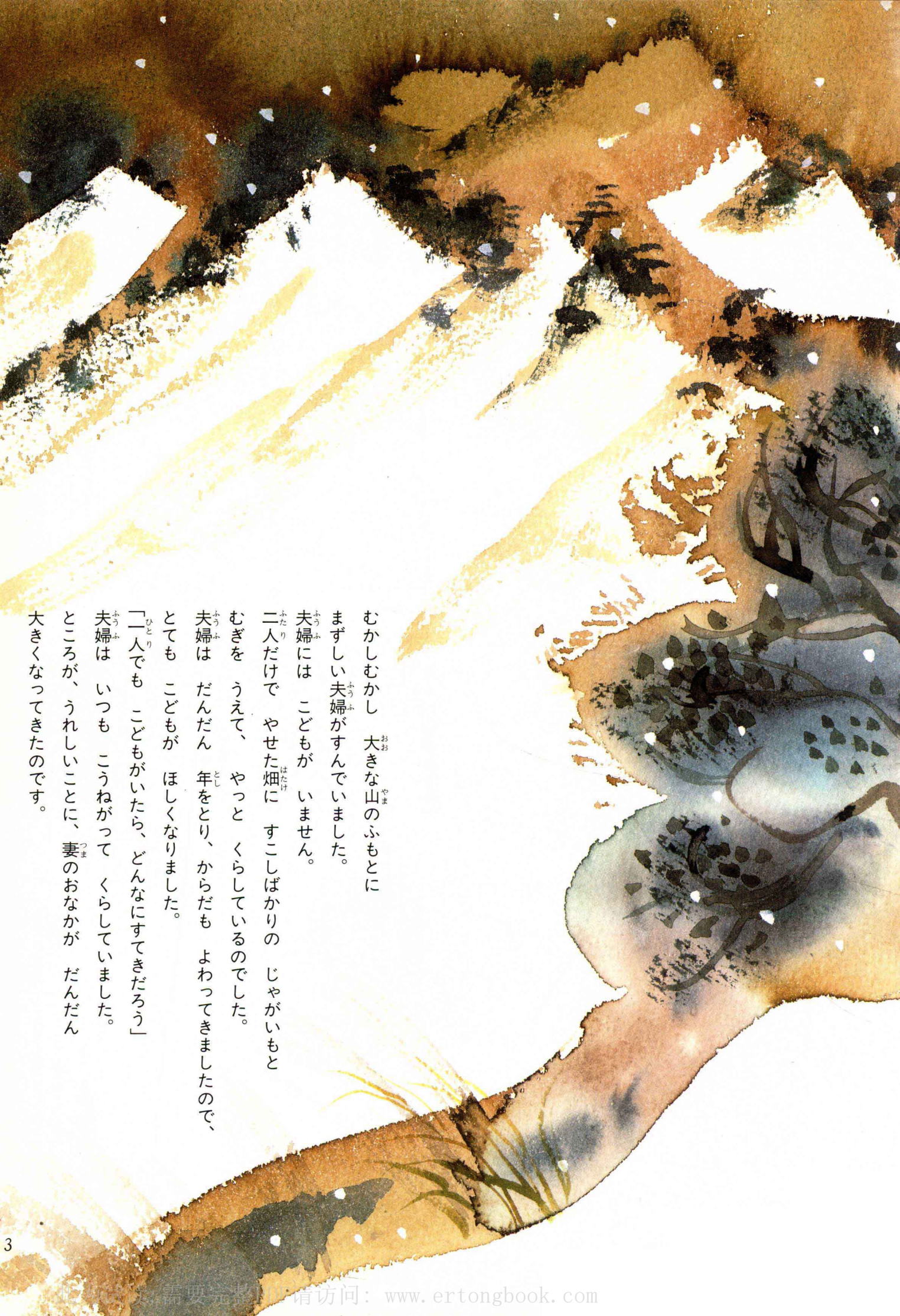
あお **青** **が** **え** **る** **の** **騎** **手** き しゅ

中国民話／絵・チエルシノヴァ



創風社





むかしむかし 大きな山のふもとに

まずしい夫婦がすんでいました。

夫婦には こどもが いません。

二人だけで やせた畑に すこしばかりの じゃがいもと

むぎを うえて、 やっと くらしているのです。

夫婦は だんだん 年をとって、 からだも よわってききましたので、

とても こどもが ほしくなりました。

「二人でも こどもがいたら、どんなにすてきだろう」

夫婦は いつも こうねがって くらしていました。

ところが、うれしいことに、妻のおなが だんだん

大きくなってきたのです。



どうしたことでしょう。

ふつうは、十カ月してうまれてくるのに、
七カ月で うまれてきたのは

にんげんのこどもではなく、かえるだったのです。

夫は いいました。

「ほんとうに かなしいことだね、かえるが うまれるなんて

池に はなしてやるより しかたがない」

妻は こたえました。

「かなしいけれど そうしましょう」

夫は かえるを 池に はなそうとしました。すると

「おとうさん おかあさん 池に はなさないでください。

わたしは にんげんから うまれたのですから

にんげんといっしょに そだててください」



なんと かえるが にんげんのことばで 話したのは。

おとうさんと おかあさんは びっくりしました。

おとうさんと おかあさんは かおを みあわせて いいました。

「おかあさん

にんげんのことばを話す かえるが いるなんてふしぎだね」

「ほんとうに ふしぎですね。にんげんのことばを話す

かえるは ふつうのかえるでは ありませんよ。

そだててみましょう」

二人とも やさしい人でしたので かえるを 自分たちの

こどもとして かわいがって そだてることにしました。



こうして いつのまにか 三年かん すぎました。

ある日^ひ かえるは おかあさんに いいました。

「おかあさん あした まんじゅうをつくってください。

わたしは 長者^{ちやうじや}の家^{いえ}にいった およめさんを もらってきますから」

おかあさんは びっくりしました。「なにを いうのかい。

おまえのように ちびで みにくい かえるに

たいせつな むすめを くれる人^{ひと}なんかいないよ。

にんげんに ふみつぶされてしまうから いかないでくれ」

「おかあさん しんぱいしないでください。

かならず およめさんをつれて かえってきますから」

あまりにも かえるが ねっしんに たのむので とうとう

おかあさんは まんじゅうをつくって

ふくろに いれてやりました。

かえるは びよんびよん はねて

長者^{ちやうじや}の家^{いえ}に かけていきました。



長者ちやうじやの家いえについた かえるは

門もんのそとから 大きなこえで さけびました。

「長者ちやうじやさん 長者ちやうじやさん 門もんをあけてください」

長者ちやうじやは かえるのさけびごえを きいて なにごとか
とおもって めしつかいを みにかせました。

めしつかいは びっくりして もどって きました。

「長者ちやうじやさま なんとふしぎなことでしょう。」

門もんのそとにいるのは かえるなんです。

かえるが にんげんのことばで さけんでいるのです。

これは きつと ばけものがきたのです。

ひねりつぶして しまいましょうか」



「まてまて なにかわけがありそうだ。

かえるは 水のなかみずにいるのだから もしかしたら

竜宮りゅうぐうからのつかいかもしれない。ていねいに おむかえしなさい」

そういつて 長者ちやうじやは門もんまで でていきました。

「ちいさい かえるさん。あなたは 竜宮りゅうぐうからの

つかいでしょう。なにをしに こられたのですか」

「いいえ わたしは 竜宮りゅうぐうからの つかいでは ありません。

あなたには 三人さんにんのむすめが いますね。

そのなかから ひとりを わたしの およめさんにもらいたいのです」

長者ちやうじやは びっくりしました。

「かえるよ からかうのは やめなさい。

よく じぶんを みなさい。

そんなに ちびで みにくい かえるに

どうして たいせつな むすめを やれようか」

かえるは いいました。

「長者ちやうじやさん いやだというのですか。

それでは わたしは わらいますよ。それでも いいですか」

長者ちやうじやは かんかんになって おこりました。

「かえるよ わらいたければ わらうがいい。

だが おどろくものか」







かえるは わらいだしました。

「わっ はっ はっ」

それは 夜^よなかに 池^{いけ}で泣^ないている かえるよりも
十^{じゅう}ばいも 百^{ひゃく}ばいも 大^{おお}きいこえでした。

かえるが わらうたびに

じめんは 大^{おお}きくゆれうごきました。

長^{ちやうじや}者の家^{いえ}のひとたちは

まるで 大^{だい}じしんにでも おそわれたように

はしらに しがみついて ふるえています。

とうとう 長^{ちやうじや}者は かえるに

たすけを もとめました。

「たすけてくれ。もう わらわないでくれ。

長^{ちやうじや}女^よを おまえのよめにしよう!!!」





かえるは わらうのをやめました。どうしたことでしょう。

あんなに ゆれていたじめんが しーんと しずまったのです。

長者は ちやうじや しぶしぶ ちやうじよ 長女に

かえるの およめさんになるように いいました。

そして 馬を うま 二頭 にとう つれてきて、一頭 いっとう には よめいり道具 どうぐ を

もう一頭 いっとう には およめさんを のせました。

むすめは かえるのおよめさんになることに がまんできません。

馬 うま にのるとき 小さな石 いし うすをみつけ、こっそり

石 いし うすの上の方を ふところに かくしました。

かえるは 馬 うま のまえを びよんびよん

とびはねながら 家 いえ にむかいました。

むすめは 馬 うま のひづめで かえるを ふみころそうとします。

しかし かえるは そのたびに みぎ ひだり 右に左にと

ひづめを さけます。



あせった むすめは ふところから 石^{いし}うすを とりだして
かえるをめがけて なげつけました。

そして 馬^{うま}のむきをかえて いそいで にげかえろうとしました。
いくらかも にげないうちに うしろから
かえるのこえが きこえてきました。

「むすめさん ちょっと まってください」

石^{いし}うすの下で つぶされたはずの かえるが

ぴよんぴよん おいかけてくるではありませんか。

かえるは 石^{いし}うすの小さなあなから

ぬけだしていたのでした。

むすめは びっくりして 馬^{うま}をとめました。

「わたしたちは えんがなかったようですね。

かえりたければ おくっていきましよう」

かえるは そういうと

馬^{うま}をひいて 長者^{ちやうじや}の家^{いえ}にもどりました。



